

槐

かい

岡井省二創刊

平成27年10月号



風死す

高橋将夫

母^ほ衣^ろ蚊帳や母が子にしてやれること
少年と同じ道ゆく夏野かな
兜虫持つ子が主導権を持つ
螢火は螢も人も呼び寄せり

土星の輪回りだしたる暑さかな
白南風やいのち集まる潮溜り
白斑を散らし天牛飛び立てり
斥候の蟻が来てゐる金平糖
走馬灯やがて未来も回りくる
風死すや平和は乱の中にあり
火取虫引き止めるもの誰もなし



槐安集

水野恒彦

夾竹桃一夜ねむりて血を濃くす
神のこゑ湧くごと午後未草
巫女去りて常磐木落葉ばかりなる
蛇のぼる樹の閑けさに昼の星
しんかたる大夕焼より父のこゑ

加藤みき

正座して涼しきこゑを聞きゐたり
有明方貼絵になりし寝待月
日かかんかん蝙蝠傘を日傘にす
川音や定家葛の花ありぬ
露草の流れつきたるここに咲く



中島陽華

子が呉れし天牛放つ太鼓橋
覚えある雪駄の音や夏至の夜
卯月野や達磨大師に御燈を
これやこの西日塗れの道成寺
愛宕山絵日傘挿して降りやんせ

竹内悦子

荒梅雨の梅田に京の紙袋
あかときの畦の湿りや稲の花
松の実の散らばつてをる薄暑かな
つはぶきの青に滴りありにけり
何に狂ふや風鈴の賑々し

雨村敏子

鬼灯のくれなゐの闇鑑真忌
梶の葉の風聴いてをる豊かな
葦原の風ちちはを訪へるなり
道中は麦藁蛸と弥次喜多と
源流へ汗ほとばしるけもの道

近藤喜子

日照雨ぱらりと蟬の喉うるほしぬ
玉虫の時を追ひ越す光かな
はまおもと夕べ祈りの色ふかむ
波の間に言葉おくやう夜光虫
浮いて来い抱きて眠る青き星

本多俊子

空蟬の心の音を忘るまじ
どくだみの咲いてさらりと生きるかな
白上布潮の光に祈りかな
しののめの石のくぼみに青しぐれ
ひつそりと天上天下青かりん

瀬川公馨

台風前夜何をしてをるそこな者もん
百年の恋覚めやらす濁り鮎
バスチーユに向きをかへたる蟻地獄
十二音階膨らみきらず八月尽
ウォーターフロントの夕べ夕風

久保東海司

山の蟻町の蟻程働かず
少し病み少し癒えたり甘酒を
滝見茶屋轟音耳に甘酒を
降り立ちて白鷺青田まぶしめり
展望の稲田明りの眼に余る

柳川 晋

百丈の阿倍野ハルカス三尺寝
鬼門より建て始めたる夏館
名人の匏屑なり水中化
骨のある水母を探してをりにけり
浮いてこい言はれなくとも浮いてやる

熊川暁子

尺蠖の測り残しの今日がある
丸き笈背負ひし過客かたつむり
骨切られつぎつぎ鱧の花ひらく
御簾ごしに憂き世の揺れを見てをりぬ
炎昼や歪みし顔を持ち帰る

寺田すず子

カーテンを揺らして夏の来たりけり
火の渦に巻き込まれゆく火取虫
水すまし甕の水面を宇宙とす
岩清水含めど消えぬ渴きかな
目醒むれば森羅万象蟬しぐれ

岩下芳子

越前や水母に慣ふ過ごし方
どさつと落ちし蛇に油断のありにけり
骨切りのリズムよろしき祭鱧
強運の一白水星生身魂
菊五郎格子の浴衣男ぶり

近藤紀子

夏暁や鳥楽団のチューニング
大輪のダリアにかつと晴れ間の日
羅が連れだちて行く葵橋
神域の夏鶯の聲しきり
夏蓬葉裏白じら夜を眠る

岩月優美子

深山に神の声とも滝落つる
天に昇り地に落つる心地大花火
合歓の花揺れて天界賑々し
大夕焼叫びたきもの拒まずに
螢火の奥は精霊漂ひぬ

竹中一花

夏越川夜も木の葉の流れけり
薬玉を折る千代紙の青海波
揚羽追ふ水辺の光背ナにして
氷室への山路なりけり水流る
灯明の奥の玉巻く芭蕉かな

槐市集

有松洋子

炎昼やみんな何かを叫びみて
大夏野羽音ひびかせサタン翔つ
白き蛾の骸落ちぬる病み上り
姥捨の山に夏霧人のごゑ
力こめ毒草を刈る溽暑かな

中島昌子

ほととぎす阿吽の虎の真上より
万緑の底に鞍馬の九十九折
菩提樹の花の下ゆく荒法師
木の根道天狗の息の荒々し
葵橋渡り葛餅家苞に

中田禎子

会報の幽霊会員水中花
ラベンダーのポプリロイヤルミルクティ
飛び石に蚯蚓からびてあたりける
弥生人の血の少しあり青田風
夏帽子と墓のカタログありにける

中谷富子

炎天に力の入る杖の音
幾万の人の波波終戦忌
父の日の父の似顔絵眉太し
毒舌のうらに愛あり蟬時雨
夕顔や背丈くらぶる幼き子



中林晴雄

自転車に褪せし旗垂れ氷菓売
一蹴りに水窪ませつ水澄し
銚立の縄一端を貫ひけり
初真桑縦に切ること迷ひなし
原子炉の排水口の大水母

橋本順子

白靴の巨船の影を通りけり
日の下に切り口白し竹伐会
初蟬や水道水に勢ひある
豊満な土偶なりけり雲の峰
溶岩のどんとありたる夏野かな

前田美恵子

汗の身の点滴を受く体たらく
前田和家邸
夏草や礎石確かな隠居跡
苔の花平家の墓の海に向く
浜風に誘はれてをり夏座敷
夜濯の音の気になる侘び住ひ

柳橋繁子

子が母をさがしてをりぬ昼寝覚
影向の松や半夏の能舞台
羽衣や吹かれてゐたる蛇の衣
近道や腓を濡らす草の露
鉄眼の一切経堂風涼し

安野眞澄

あぢさゐや雨には雨の顔をして
石段を登りきつたる蓮の花
生も死も一つなりけり半夏生
凡庸に齡重ねし茄子の花
百度石に行きつ戻りつ赤とんぼ

山田佳子

銚祭洛中の街一色に
天界に届けと供華の大花火
移りゆく時空の中に終戦日
どんどこ舟棹一斉に漕ぎ出す
船渡御や大阪じめの風の吹き

吉田順子

ゆらり来て夏蝶人の輪をひろげ
菩提樹の花の真昼の香りかな
初蟬や五、六度鳴きて消え去りぬ
星流る地を曳くごとく潮引く
浜木綿の白の浮き立つ海の闇



槐集

高橋将夫選

情念や女人高野に蛇を踏む 大阪 有松 洋子

黒揚羽死者のたましひ乗せて舞ふ

風鈴や黄泉平坂微風あり

髪洗ふけふの私を許すため

歲月やけふの裸身をいとほしむ

肌脱の菩薩の腹はぼつこりと

虚勢張る十二神将油照

清純な百合の中にも鬼小鬼

夏祭男狂はす魔力秘む

片かげり尺八の音は風となり

大日の呟きのごと滴れり 岡崎 犬塚李里子

峰雲の向かうときめきありにけり

半夏生研ぎて音よき花鋏

明易し夢に紫ワンピース

天牛かみきりの目合まはひ見たり雨の中

大いなる山見たる夜のかたつむり 岡崎 吉田 順子

屋月のありどを探す黄菅原

青梅の木にあるうちは影もたず

天空にのびて光の凌霄花

億年の虚空に楚々と夏の月

すぎし日の良くも悪しくも浮人形 柴田 靖子

坂の道のぼりつめれば虹の橋

昨日より今日良くあれと日日草

熊蟬の声に足止む風すぐる

鉄人のすたすたと行く夏の天

ヒマラヤの空より青きけしの花 守口 中道 愛子

そら豆を剥けば命のほとぼしる

デイゴ咲く戦中戦後生き抜きし

射干を活けて都のど真ん中

六甲や行く先々の青嵐

銀河往来 高橋将夫

◇『槐集』鑑賞

情念や女人高野に蛇を踏む 有松 洋子

まさか実景とは思えないが、それにしても怖い精神の風景。
道成寺の清姫を思い出す。女人は怖い。

髪洗ふけふの私を許すためへ歳月やけふの裸身をいとほし
むの句、自分らを客観的に見つめる作者がそこにいる。

黒揚羽死者のたましひ乗せて舞ふへ風鈴や黄泉平坂微風
ありへ、どの句も作者ならではの視点を持つ精神の風景。

清純な百合の中にも鬼小鬼 江島 照美

清純な百合に小悪魔的な側面があるのはかわいいが、鬼とな
るとそうはいかない。

肌脱の菩薩の腹はぼつこりとへ句、菩薩は女性の暗喩と
とれなくもないが、上品に菩薩像と解釈した。へ虚勢張る十二
神将油照へ句、油照でもそのいかめしい表情を崩せないのが
十二神にとつて辛いところ。へ夏祭男狂はず魔力秘むへ句、
表現がストレートなだけに、祭りの迫力がよく伝わってくる。

大日の眩きのごと滴れり 犬塚李里子

滴りの一滴一滴が大日如来の眩きように聞こえるという精
神の風景。

半夏生研ぎて音よき花鋏へまことにすがすがしく、へ明易し
夢に紫ワンピースへ句は、紫ワンピースが実に鮮明で印象的
である。

青梅の木にあるうちは影もたず 吉田 順子
青梅がまだ木に生っているうちは一人前ではない。一人前に
なつてこそ影も付いてくるという。まさしく核心をついている。

すぎし日の良くも悪くも浮人形 柴田 靖子

振り返つてみれば、良きにつけ悪きにつけ、浮人形だった
という。それで良かったのか、悪かったのか、自問自答。

ヒマラヤの空より青きけしの花 中道 愛子

なんともピュアで壮大な景。へそら豆を剥けば命のほとば
しるへ、へ射干を活けて都のと真ん中へ句に作者の尋常でない
精神の風景を見る。

水の地球水の近江の浮巢かな 中林 晴雄

近江の浮巢を詠んでいるのだが、地球規模で詠めるあたりは
さすがと感心させられる。へ泳ぎ子の唇蒼し巖の上へ句、唇
が紫色になるまで溪流の冷たい水で泳いだ後に、岩の上で甲羅
干しをした子供が懐かしい。へ七夕笹メビウスの輪も加へ
けりへはまさに俳諧。

仮寝の螢となりて乱世へ 前田美恵子

螢になつて夢の夜を過ごせると思つたら、乱世に行くことにな
らうとは。うたた寝だからすぐ覚めてしまうのだろうか。

目まとひに憑かれ入目を濁しけり 後藤マツエ

美しい入目がまくなぎのおかげで濁つてしまつて残念。へ蚊
を叩き夢を潰してしまひけりへ句は俳諧味たっぷり。

へ以下略